



授業評価から学修自己評価へ : 大阪府立大学eポートフォリオの取り組みを例に

星野, 聡孝

(Citation)

大學教育研究, 24:171-207

(Issue Date)

2016-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009404>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009404>



授業評価から学修自己評価へ —大阪府立大学eポートフォリオの取り組みを例に—

講師：星野 聡孝（大阪府立大学 高等教育推進機構 教授）

司会（山内）： それでは、定刻になりましたので、大学教育推進機構のFD講演会を開催させていただきます。

本日は、大阪府立大学から星野聡孝先生にお越しいただいております。

星野先生の御講演のタイトルは、こちらにございますように、授業評価から学修自己評価へ、大阪府立大学eポートフォリオの取り組みを例に、ということでございます。

最初に、僭越ですが私のほうから星野先生の紹介と、それから、なぜ、星野先生をお招きするに至ったかという経緯についてお話をさせていただきたいと思います。

星野先生は京都大学理学部、大学院理学研究科を経られて大阪府立大学に奉職しております。それにつきましては後ほど先生のほうから御案内があると思います。

先生の御専門は物理と化学と、どちらか、私が拝見したところ分かりかねますが、御専門は結晶成長と表面科学ということです。文科系の人間の私には少し難しそうだなということ以外何も分かりません。星野先生が非常に教育に熱心そうな先生であるというのは、先生のホームページを拝見したところ、御自分の物理学の授業を映像で撮ってアップしておられて、配付の資料も全てアップしておられることから十分にわかります。さらに演習問題とその解答も全部15回分アップしておられます。授業を欠席した学生も、あるいは寝てしまったとかいう学生も勉強して復習できるように配慮しておられるということです。今日の御講演も非常に期待ができると非常に楽しみにしていました。

なぜ、星野先生に御講演を依頼したかと言いますと、本学でもあるいは近隣の諸大学でも同様と思いますが、授業評価アンケートの回収率が低下している。これはどの大学でも共通する課題と思いますが、そういったことが議論されていた中で、大阪府立大学でeポートフォリオというのを導入されたとうかがいました。従来の授業評価が教員のために、大学のためになされていたのに対して、eポートフォリオでは、その発想を転換して学生のために、学生が自分の学修を振り返るためにやるということです。学生に目的意識を持たせて実施するというわけです。また、データもeポートフォリオでやれば蓄積されていくわけです。授業評価アンケートであれば書いたらそれで終わりですが、ポートフォリオであれば蓄積されていく。そういうメリットがあるわけです。これは一度お話しいただかないといけないなと考えました。私は関西地区FD連絡協議会のフォーラムで大阪府立大学のパネルセッションでそれを拝聴しまして、そう痛感しました。

大阪府立大学では、2012年4月から「学習・教育支援サイト」というのを立ち上げられまして、このeポートフォリオを導入されまして、学生・教員の自己教育・自己改善

支援ということで、これに取り組まれて、ちょうど3年目を終えられるところにきているということです。

それについて、私が大阪府立大学の先生方と御相談したら、その件に関しては星野先生が最適任であるということでした。年度末の恐らくは御多忙を極めておられる中、無理をお願いして、今日お運びいただいたということです。

それでは、星野先生、どうぞよろしくお願いいたします。

星野先生： 御紹介、どうもありがとうございました。

また、本日は私を講演に呼んでいただきまして、心から御礼申し上げたいと思います。山内先生、それからスタッフの皆様方、どうもありがとうございます。失礼してちょっと座らせてやらせていただきます。

では、私、星野聡孝と申しますけれども、この名前、アキタカ、なかなか読んでもらうことがほとんどなくて、今まで読んでいただいたのは、中学校のときの国語の先生が初めて私の名前をちゃんと読んでくれたときには感動したものです。ちなみに、この私の聡孝の「聡」という字は、私の世代だと多分御存知かと思うのですが、「ルビーの指輪」という歌がヒットしましたが、あの寺尾聡という方がいらっしゃるのを覚えておられるかと思います。あの「聡」という字は、実はこの「聡」という字の旧字体というか、古い字でして、その新しい字が私の「聡」となっておりますので、それを覚えておいていただくと、私の名前、アキタカと読むのもさもありなんというふうに御理解いただけるのではないかなと思っております。

では、本日の私の話を進めたいと思うのですが、今日の私の話、一言で申しあげまして、先ほど山内先生からほとんど言っていたようなものですがけれども、本学、大阪府立大学では授業アンケート一本学では授業アンケートと呼んでいますけれども一をやめまして、それでeポートフォリオというものを導入することにいたしました。やめようと言いつ出したのは実は私です。私何でそんなことを思ったのか、あるいはどういうふうな経緯でそれをやめるようになったのか、あるいはどういう経緯でeポートフォリオを導入したのか、それからまたはどんなeポートフォリオなのか、あるいは、そもそもeポートフォリオって何なのか、あるいはそれって結局導入して役立ったのか、ということを多分皆さん疑問に持たれるかと思います。今日は、これらの話について少しずつ順を追ってさせていただければと思っております。

本題に入る前に、少しだけ本学の紹介をさせてください。

大阪府立大学、私がいますのはこの真ん中のこの辺ですね。ここに中百舌鳥キャンパスというのがありますが、ここが私のいるところでして、大阪中心部から少し南に位置しています。これ、グーグルマップの写真ですがけれども、中百舌鳥キャンパスから3キロメートルほど先のところにはいわゆる仁徳天皇陵というのがございまして、歩いて1時間弱ぐ

らいになるかと思いますが、そこら辺、歴史に詳しい方は「ああ、あそこら辺か」というふうに御理解いただけるかと思うのですが、私は歴史に疎いので多分そう聞いてもどこか全然分からなかったと思いますけれども、そういうところに私ふだんは通っております。キャンパスは三つに分かれています、そのうちの中百舌鳥キャンパスにいるということになります。

少し歴史をさかのぼらせていただきますと、もともとは1883年に獣医学講習所というのが設置されたのが本学の一番の始まりということになっておりまして、約130年の歴史を有していることになります。神戸大学でも多分似たようなことで、確か神戸病院がもともとあって、そこら辺からということをやっとホームページのほうで拝見させていただきましたが、多分同じような形の大学かと思います。

大学としては1949年に浪速大学というのが始まりでして、浪速大学と申しますと山崎豊子の小説「白い巨塔」を思い浮かべる方もいらっしゃるかと思います。あれは実は、本当はうちの大学が浪速大学でして、あちらは国立浪速大学医学部なのですが、うちは国立でもなく医学部もなく、ぜひうちの大学を舞台にしてほしかったなと思いますけれども、浪速大学は実は本当はうちが浪速大学でした。それからしばらくして2005年になりまして大阪府立大学、大阪女子大学、大阪府立看護大学、この三つの大学が統合法人化しまして、このときに私、大阪府立大学に勤務することになりました。その後、いろいろ紆余曲折が実はあったのを御存じの方も多いかと思うのですが、2012年から7学部28学科の体制を改めまして、学士課程教育の改革を行い、4学域13学類という体制へ大きく転換することになりました。このタイミングで実はeポートフォリオを導入することになったのですが、このeポートフォリオの導入とこの学士課程教育の改革っていうのは基本的には実はほとんどリンクしておりません。たまたまそういうタイミングになったというだけであります。

学生数8,000名、教員数700名ということで、多分、神戸大学の約半分の規模だと思います。

うちの大学のおおよそのことを御理解いただいた上で、これから本題に入っていかなければと思います。

今日の話は大きく分けて四つの話をさせていただければと思っております。

一つはまず、なぜ、私が授業アンケートをやめようと思ったのか、また、その後のようなことを、どういう経緯を経てeポートフォリオを導入するようになったのかという話が最初。次に、うちで導入したeポートフォリオ、これは完全にうちの大学で仕様等を決めて業者につくっていただいたものですが、教員と職員一緒になって作り上げたシステムです。それがどういうシステムなのかということを、まず学生の立場から見た場合のお話を最初にさせていただき、その次に教員の立場から見たときにどういうふうに見えるのか。本学のeポートフォリオについておおよそのイメージを持ってい

ところで、最後にポートフォリオってそもそも何なのか、あるいはどういう意義を持っているのか、結局、それがうちの大学にとってどうなっているのか、というお話をさせていただければと思います。

では早速、その背景と経緯というところに移らせていただきます。

まず、私のほうから自己紹介をほとんどしていませんでしたので、簡単に自己紹介を兼ねて、なぜこういうことを行うようになったのかという話を最初にさせていただきます。

先ほども申しましたように、私が大阪府立大学に着任したのは2005年の4月、3大学が統合法人化したところからでございます。当時の総合教育研究機構、今の高等教育推進機構ですけれども、その専門基礎の物理学を教える教員として、私は大阪府立大学に着任いたしました。その当時、その3大学統合にあわせて高等教育開発センターも設置されましたが、私はそことは全くの無関係で、そのセンターが設置されていることすら私は知らなかったということになります。

実はこの2005年の4月、私、このとき助教授として着任したわけですが、それまでは助手でして、もちろん実験の科目などは当然担当して、大学院の教育の指導とかも当たってはいたのですが、講義科目を担当するのはこのときが実は初めてでして、2005年初めて着任して講義を受け持つことになって、最初の講義のときに本当に緊張したのをよく覚えております。ですので、それぐらい、私、あまり何も教育についてはよく分かっていなかったというような状態でした。ですので、今ではFDというのは当たり前のことになりましたが、当時はFDなんて言葉すら私も全然知らない状態でした。

それから2年ほど経まして、2007年の4月からは、高等教育開発センターの所員という立場に立つことになりました。ただ、このときも、うちのセンターは、当時まだまだ弱小でして、単に私も所員の立場として月1回の会議に出て何かちょっとしゃべって、言いたいことを言って、たまに講演のお手伝いをするぐらいの、それぐらいの軽い立場であったわけです。

ところが、いろいろなことがあったのかどうか分かりませんが、2009年の4月からは、高等教育開発センターの主任をやれということになりまして、うちの大学での主任という立場は結局何でもやらなくちゃいけないというか、一手に仕切ってセンターの具体的な運営を全てやるという立場に立たされることになったわけです。このころからいろいろと、その前後からいろいろ高等教育、うちの大学の教育についていろいろと考えることも多くなりました。今日お話することのきっかけもその前後からいろいろあったということになります。

2009年の4月、初めて会議を開かなくちゃいけない。そうすると議題も何もかも、私が全部まず用意して、資料も用意してということをしなくてはいけないということになったわけですが、その議題を用意する際に、いろんな議題がもちろんあるわけですが、それまでの懸案だったことを取り上げないわけにはいかないだろうということ

で、4月以降、課題になっていた授業アンケート、本学での授業アンケートについてちょっと議論したいなと思っていろいろ考えることになりました。

皆さん御承知のように、今、授業アンケート、本学では授業アンケート、一般的に授業評価アンケートと言われることも多いかと思いますが、本学では教員の評価のためのというよりは、授業の改善のために行うアンケートという意味を強めるために授業アンケートという名称で行ってききましたけれども、全国的にも授業評価アンケートというのはいろんなところで実施されておりまして、皆さんよく御承知かとは思いますが、これ、文部科学省の毎年行っている調査で、「大学における教育内容等の改善状況について」というのからデータを引っ張ってきていますけれども、2012年で94%ですから今はもうちょっと多いかもしれませんけれども、ほとんどの大学で授業評価アンケートを実施しているという状況になっております。このグラフにありますように、2005年から本学でも、先ほど申しましたように、授業アンケートを実施するということになったわけです。

ただ、課題になっていたのは何かというと、先ほど山内先生からも御指摘ありましたように、本学でもWebで授業アンケートを実施していた関係で、最初はまだよかったのですが、年々回答率が低下していきまして、それを何とかしないといけないうと、私が主任になる前からかなり長い時間をかけてどうしたらいいかということをしていろいろ議論してきました。

その中で、いろんなことを本学でも対応策として考えてやってまいりました。ここにありますように、まず、そもそも学生に最後に回答してもらってもメリットがあまりないので、中間アンケートっていうのを実施して、そこでいろいろ上がってきた課題をその後の授業で改善してもらおう、そのために中間アンケートを実施してみようということで、これは途中からずっと実施しておりました。

それから、それでもなかなか回答率が上がらないということで、やっぱり紙でやったほうがいいのかもしれない、紙だったら確実に授業の中で配ってやれば回収できますので、紙でやってみてもいいではないかという話もあったのですが、ただ、やっぱり紙ですと手間も暇も金もかかるということ、それからフィードバックのタイミングも遅れるとかいろいろなことがあって、本当はなかなかやりたくないところですが、一応とりあえずやってみて、何か大きな違いがあればやってみてもいいのではないかなというように、これも何度か試行実施をしました。

それから、それもなかなかということで、手間もかかるしということで、じゃあ、携帯電話を使ってやってみたらどうかということで、これもシステムをちょっと学内でつくってもらって、簡単なシステムをつくってもらって実施もしましたが、これもちょっといろいろな経緯があって、やっぱりこれもなかなか難しいかな、少なくともうちで簡単につくってみたシステムだとうまいこといかないなということで、なかなかいい対応策っていう

のが見つからないと。そういうような状況で私が主任の立場になって、何とかしないといけないなということで考え出したわけです。

ただ、そもそもは回答率の低下に対して何とかしたいというのがモチベーションとして最初あったわけですが、よくよく考えてみると、授業アンケートあるいは授業評価アンケートといったものって今のままで本当にいいのだろうかということを、私はその当時考えるようになりました。いろいろな課題がそこにはあるなというふうに感じたわけです。

一つ目、ここにありますように、授業評価アンケートと称すると特にそうかと思えますけれども、どうしても授業の評価、学生に評価してもらうということが中心になってしまいます。本学ではあくまでも授業改善のためと言っていたわけですが、どうしてもやっぱり上のほうから評価されているみたいなのうに捉えられてしまうことが多く、今では大分雰囲気は違うかもしれませんが、当時は学生から評価されることに対して、教授・先生方、抵抗感を示される方もいました。中には「私にはもう結果は返さないで」とおっしゃられる先生方もいたりしました。

それから、授業評価を中心ということで、どうしても必ずこういうアンケートでは満足度というのを聞くのが当たり前になっております。そうすると、満足度にどうしても目がいつてしまって、学生に満足度を問う、じゃあ、学生ってそもそも満足、学生が満足する授業ってどうなのだろう、そうするとどうしてもやっぱり単位を出してくれる先生方のほうが、満足度が高くなるのではないかと、あるいはそのためには授業のレベルを落とさなくちゃいけないのではないかと、いろいろなことを先生方が危惧されていました。

それからまた、授業評価ということと言いますと、例えばいろんな質問項目ありますけれども、例えばシラバスがちゃんと書けていたかとか、あるいは板書がどうだったかとかいろいろなことを訊かれるかと思えます。ただ、例えばシラバスの評価を学生にさせたとして、そもそも学生はシラバスをどういうふうに評価したらいいのかということを、その評価の指標といったものを与えられていないところで学生にシラバスの評価をしろといっても、やはりそれ、どれだけあてになった評価になるのかといったことを非常に私自身も多少クエスチョンマークをつけたくなります。ですので、学生に評価してもらう、確かに満足度というのもそれなりに意味がある項目だとは思いますが、そういうのをもう少し変えていかなくتهいけないなと考えました。

また、せっかく授業アンケートをやったとしても、それをなかなか活用するということが難しいという状況が、少なくとも本学ではありました。一つは回答率が低下するとどうしてもなかなかそれが教育に生かせないというのはもちろんあるわけですが、それだけではなく、また、回答してもらった結果を個人でじゃあどうやって使っていくかっていったときに、1回のデータを見て、満足度を見て「ああ、今年の満足度だめだったな」それで終わってしまったらもったいない。ただ、それを今までのデータを見て分析して、

「じゃあ、今度こう変えていこう」っていうふうにしようと仮に思ったとしても、なかなか忙しい教員がそういうことをできるかというと、そういう時間ありません。

また、本学ではですけども、部局によってその質問項目が結構異なっていて、例えば部局間での違いを見たいというような場合になかなかそういうことができないというような状況にありました。

それから一番の問題は、そもそもこういうアンケートに回答してもらったとしても、学生に対してどれだけのメリットがあるのか。もちろん1年後には別の授業でそのメリットを受ける学生がいるのは分かるのですが、それも教員が改善をしてくれた場合に限りまし、なかなか学生の直接的なメリットというのがないというところが非常に大きな問題であろうということで、本学に限らずかもしれませんが、授業アンケートあるいは授業評価アンケートにはさまざまな課題があるだろうということを感じたわけです。

ただ、私の経験、2005年から授業を始めて、授業アンケートが2005年の後期からちょうど始まったわけですが、その授業アンケート、私はそれをどう感じたかということをやっと次にお話させていただきたいのですが、そのためにちょっと私の実例を見ていただきたいと思います。お手持ちの資料にはちょっとないものになっていますが、これは私の授業の満足度を経年で追ったものです。私は授業で「物理学Ⅰ」と「物理学Ⅱ」を前期と後期一つずつやっていたので、それを順番に経年的に並べてみたものです。青が私のほうです。緑のほうが部局平均ということになっていて、最初、アンケート結果を返していただいたときに、実は、大変ショックを受けました。なぜショックを受けたかというと、部局平均が4.08で、私が4.00というポイントで、ほんのわずかなだけ部局平均を下回っていました。質問項目6段階の評価になっていて、1から6、その平均と私の平均です。

それが私、非常にくやしかった思い出があります。今から考えれば、統計的有意性を考えると全く意味がないのでその差は有意ではないのですが、やはり下回っているというのはちょっと悔しかった。そこで、その次の年からは大分頑張らして、というか、それまでも頑張ったつもりだったのですが、一生懸命頑張って、満足度ということに関しては、その後大体平均を上回るという形でいます。

それよりも私がうれしかったのは、分かりやすさという項目で、これは実は毎年部局平均を上回っていて、一生懸命私も教えてきた甲斐があったかなと。そもそも私自身、あまり理解が早いほうではないので、できるだけ分かりやすく、自分がどうやって分かったのだろうということを考えながら一生懸命教えてきた結果としてこういうふうになったのかなと思って、個人的には非常にうれしかったわけです。

それでよかったのですが、後々、実はまたこれ気がついたことになりますけれども、理解度、これをプロットしますとこんなふうになっています。理解度のほうは、実は残念ながら私、なかなか平均を超えられないという状況でした。今でもなかなか超えにくいもの

です。これはそもそも部局平均といいますと、私のところは教養などの科目もいろいろありますので、しかも物理学という非常に理屈っぽい教科を教えていることもあり、それから、私が持っているクラスは、実は高校時代、物理をやった学生からやってない学生、情報系の学生から生物系の学生までがごっちゃになって受けている授業ということもあって、非常に苦労した授業ですけれども、そういうこともあって、ちょっと言い訳していますけれども、なかなか理解度が上がらないということで、確かに分かりやすさという点からいうと、私自身は非常に満足していましたけれども、でもやはり後々振り返ってみると、理解度、これが上がらないっていうのが、やっぱり自分の授業にとって自分が伝えたいことがちゃんと伝わってないという意味において、やはりこれは非常に問題だなということを強く感じました。

やはり大学、今、特にラーニングアウトカムズということで成果が問われる時代になっています。そういうことを抜きにしても、やはり教えてそれを理解してもらって初めてやっぱり教えた甲斐があるということになりますので、この状況、私は残念ながら満足できなかった。この理解度についてはとても満足できない状態であるし、今でもなかなか満足できない状態です。

それからもう一つ、これは授業時間外の学習時間をプロットしたものです。これを見てもらうと、これも後からやってみて初めて気がついたのですが、最初の授業のときは惨憺たるものです。実は、一番右側の黄色のところ「ほとんどなし」、1週間当たりの授業時間外の学習時間がほとんどなしという学生が半分近くにいたわけですね。これで理解しろというほうが土台無理な話なわけです。

それで、いろいろなことを私もやりまして、いろいろと改善していった、こう見ていきますと、ほとんどなしという学生が非常に減っていった、しかもその後は2時間以上勉強している学生も少しずつ増えていったということがお分かりいただけるかと思います。こうして見ると、授業の改善の効果というか、それなりにあったのかな、理解度は上がらないにしても、少なくとも勉強はしてくれているなということが後から実は分かったということです。

振り返ってみますと、私にとって授業アンケートってどういうものだったかという、やはり自分自身、初めて2005年に講義科目を受け持って、そこから授業を改善していくといったときに非常に役に立つものであったというふうに言えるかと思います。

特に、私自身が感じたことは、何が大きかったかというと、学生の学びを知ることが大事だろう。例えば板書がきれいにできたかとか、声が大きかったかとか、そういう話も確かに改善するところとしてはありがたいのですが、やはり学生がどういうふうに学んで、どれだけちゃんと学んでくれたのかっていうことが、少なくとも物理学を教えている私にとっては大事だと感じられました。

先ほども申しましたように、満足度が高ければそれでいいのかっていうと、満足度が高

くても、やっぱり学生が身につけてくれてなかったら私としてはやっぱり悲しいわけです。できるだけ理解してほしい。

それから、理解しているか、理解していないかということかというと、例えば先生方の中には期末試験の点数見ればどうだか分かるじゃないかとおっしゃられる先生方もいらっしゃるかと思います。しかし、よく考えてもらいますと、期末試験の前に学生は一夜漬けで勉強をする。一夜漬けで勉強して点数とったとしても次の日には忘れている。そういう学びをしたとして、それが本当に身についたと言えるのかどうかということを考えていただくと、やはり継続的にちゃんと普段から勉強しているかどうか、そういうふうにさせているのかどうかということのほうがはるかに大事だろうと。だから、期末試験の点数だけで見てはだめだろう。だから、例えば私の場合、学生の成績をつけるときにも、試験の点数だけではできるだけつけないようにというふうな形で、ふだんからできるだけ学びを促すように成績評価のほうもするというような工夫を一応しております。そういうことがあって、授業の改善で学生に評価してもらうというよりは、学生の学びを知るところのほうが私にとっては非常に大事だと。

それから、今、データでお見せしましたように、継続的にデータを蓄積して行って、後から振り返ってみて「ああ、こうだった」ということに気づくこと、これが非常に大事なということが改めてその当時感じられたわけです。

ただ、それをやろうと思うと、教員ってすごく大変です。私も高等教育開発センターのスタッフとして働いている関係で、こんなデータを集めたりもしましたので、それを見て初めて「ああ、そうだった」というふうに気がついたというわけですし、ただ、それを普段の先生方にやってもらうっていうのはなかなか大変だなと。そこで何とかしたいなということを考えまして、我々教員だけじゃなくて、やはり学生にも何か役に立つような仕組みをつくれないうかということとその当時考えたわけです。そこで、私はそのセンターの会議のときに、もう授業アンケートはやめてしまおうという提案をさせていただいたということになります。

そのセンターの中で最初提案をして、それですぐにどうっていう話ではなく、センターの中でもいろいろな議論をしました。それを踏まえた上で、その後の7月、2009年の7月に全学の教育改革専門委員会というのが本学にはあるのですが、ここへとりあえず提案してみよう、それで反応を見てその後のことを考えてみましょうということになりました、提案をさせていただきました。

どういう提案をしたかと言いますと、こんな提案です。従来は学生による授業評価とは言っていませんでしたけれども、どうしても学生に授業評価と見られてしまうようなアンケートだったわけですが、それを、そうではなく、学生が自らの学びを自己評価するようなものに改めていってはどうだろうか。従来ですと、システム上の問題もありますので、やって、回答したら回答しっ放し、その結果がすぐに見られるとかそういうような

システムには全くなっていませんでしたし、1年ごとにデータが消えてしまうようなものでしたので、これを何とか蓄積していつて後から振り返ることができるようにできないか。それから、従来はアンケートと称してやっていて、学生にお願いして授業をよくするためにやってねという形だったのですが、そうではなく、自分自身のためにやるものだ、そういう回答を蓄積していつて振り返るということをさせるということで、ポートフォリオという形で何とかできないだろうか。それから、教員のためだったものを、教員のためでもありますけれども、学生自身のためにもなるようなものにできませんかということで提案をさせていただいたわけです。

これは一言で言えば、よく言われていますけれども、ティーチングからラーニングへということで、教員の視線だけではなく、学生の視線、目線をできるだけそういう学びということに向けていけないかということであったわけです。

それから、授業評価という観点からいくと、これによって授業評価ができなくなってしまう方もいらっしゃるかと思いますが、授業の評価って何ですか、いろいろなポイントはあるかと思いますが、一番大事なこと、大学の授業にとって大事なことは、授業をどうよくやったかというよりは、むしろ、大学生がどれだけちゃんと身につけられたのかということで考えるべきだろう。そういう立場に立ちますと、学生による学びの評価、どういう評価、自己評価にしても他者評価にしても、授業の評価っていうのは学生の学びで評価するほうがよりよい評価になるのではないかな。そういう意味では、学生の学びを評価するということは、言いかえると教育の評価、授業の評価にももちろんつながるというふうに私自身は考えています。

極端な話をすると、教員が何も教えていなくても、学生が学んでくれる授業があれば、それはそれで教員も楽ですし学生のためにもなるわけですね。ですから、そういう授業の評価を一生懸命するよりは、学びの評価をして、まず学びを促して勉強をしてもらう。そういう形にしたほうがより本質的な評価につながるのではないかなというふうに私自身は考えています。

2009年の7月に提案をしたわけなのですが、ただし、この後、実はいろいろなことがありまして、というか、よく御存じかと思いますが、大学がつぶれるかどうかといった非常に大きな騒動がこの当時巻き起こりまして、こんな議論をするどころではなくなっていました。ただ、そんな中でも一応何とか大学が生き延びる方策を考えて、生き延びられるかなといったところになりまして少しずつ考えられるようになってきました。

その当時、ちょうどたまたまなのですが、本学の学術情報センターに関連する教員の方、それから職員の方々とお会いしていろいろお話しする機会を持つことができて、そのときに、「何か一緒にできませんか、いろんなことをやりませんか」という話が上がりました。その中で、私たちはICTアクションプランっていうのを立ち上げて、いろいろなシステムをつくっていったらどうだろうか。実は当時システムのリプレースの時期に差し

掛かるところでして、次のシステムをどういうふうにしようっていうことを考えるときに、何か一緒にできませんかっていうことを向こうから声をかけていただいたわけです。そこで一緒に何かやりましょうということで、学長にお願いして、学長委嘱の検討委員会というのを立ち上げることにしまして、センターのスタッフを中心に、それ以外も含めてですけども、ICTの教育と学習への活用、それから促進を検討する検討委員会を設けることにしました。それで、その委員会の中でアクションプランを定めて、その2011年の5月にこれを策定しました。

そのICTアクションプランを策定したわけですけども、大きく三つの柱がありますけれども、その中の一つとして本学のポートフォリオシステムをつくっていきこう。その目的はそもそも学習・教育の自己改善を主にしていこう。そういう柱を立ててポートフォリオシステムを導入しようというプランを立てて、それを認めていただいて何とか予算をつけていただくことができました。普通ですと、昔のGPの予算なんかを何とかとってシステムをつくったことが多かったかと思いますが、非常にラッキーなことになったのか幸いなことに、自前の本学独自の予算でこういうシステムをつくらせていただくことができました。

アクションプランを策定した後、急いでシステム構築を開始しまして、突貫工事で、開発期間6カ月プラス3カ月で、どうにか2012年の4月に「学習・教育支援サイト」という形で運用開始することができました。ここはちょっと飛ばします。

次に、ようやく導入したeポートフォリオなのですが、先ほども申しましたように、「学習・教育支援サイト」という形で立ち上げております。これがどういうものなのかっていうことを、最初に学生の立場から見たときにどういうふうに見えるかっていう話を少しさせていただきます。

これはその概念図になりますけれども、真ん中にあるのが学生の学修の自己評価、授業科目ごと、これが従来の授業アンケートにかわるものになります。半期終わったところでここに学生に、基本的には学生に学修の自己評価を書いてもらおうと、入力してもらうことになります。これを中心にしていくのですが、それだけではちょっとどうかということで、いろいろな教員・職員を含めて委員会を立ち上げて検討したときに、こんな仕組みでつくったらどうだろうということでこういう仕組みにしています。

それは、そもそも学生の立場に立ちますと、最初、半期ごとに学習の目標、自分自身の目標を立ててもらおう、そのための入力をできるようにしましょう。半期、授業を受けてもらったところで、その授業での自己評価を自分でしてもらおう。それを踏まえて上で、例えば成績が出たところで、半期全体、自分が立てた目標に対して、自分がこんなことをしようと思ったことに対して、振り返ってそれがどうだったかを書き込んでもらおう。それを系統的にサポートしましょう。これによって学生の学びのPDCAのサイクルが回るような形にしましょうということです。

また、これを逆に教員の立場から見ますと、シラバスで授業計画して、授業を行い、半期終わったところで学生の学びの自己評価の結果を見て、それを踏まえた上で授業・教育の振り返りを記録できるようにしておき、また来年度の授業計画につなげていただけたらという意味で、教員の教育のP D C Aのサイクルをサポートするようなシステムにできるのではないかと、そういうものをシステムとしてサポートし、データを蓄積、可視化していくことで、教員にとっても、また学生にとっても便利なシステムになるのではないかと考えたわけです。また、これは教員・学生だけじゃなく、学生アドバイザーと呼んでいる、これ教員ですけども学生の担任ですね、担任の先生方にもこういうデータをお見せして、あるいは本学の教育推進課の職員の方々にもこういうデータが見えるようにしておいて、全学的に情報共有を図ろうじゃないかという形にしました。

システム的にはこんな感じです。本来、まず、もともとですけども、ポータルがあって、教務学生システム、授業支援、出席管理とかいろんなシステムがばらばらにあって、ここに新しいシステムをさらに並べてくっつけても不便なだけなので、しかも半期に1回しか使わないようなシステムでは少し問題があると思いましたので、ちょっと変えて、ここに「学習・教育支援サイト」という形で、ここにポートフォリオシステムを導入し、ほかのシステムと授業単位でこういうのをつなぐような形にしています。

具体的に見てもらったほうが早いかなと思いますので、これが学生用の画面になります。学生の画面、まず真ん中のカラムのところ、ここら辺を見ていただきたいのですが、ここを見ていただくとこんなふうにつくってあります。真ん中の水色のところ、これはP、P l a nという意味ですけども、ここが半期の自分自身の学習の目標を記入してもらうところです。簡単なこれだけのスペースです。できるだけ簡単にということまでしています。それから、ここに受講中の科目が並びます。そうするとこれが半期のD oに相当するところです。最後のC h e c kのところ、半期を振り返るときに出てくるのですが、そのときになるとここが出てきて、ここからクリックしていくと半期のチェック、自分自身の学びを振り返れるようになっています。これが半期全体で見たときのP D Cに相当するところになっているのですが、下のところ、授業のところを見ていただくと、ここにシラバスがあって授業支援システムの、うちはM o o d l eを入れているのですけれども、その授業の各ページに飛ぶようになっています。それから、ここに「授業ふり返り」と書いてあるところがあるのですが、これが従来の授業アンケートにかわるものを行うところになります。これもその期間になるとリンクがアクティブになるという形になっていて、P l a nが書いてあるシラバス、授業支援システムで実際の授業のサポートをするD oの部分のところ、それから振り返るC h e c kのところ、順番に並ぶような形になっています。それらの結果を半期ごとにデータが蓄積されるというような形になっていて、できるだけその日常的な学習教育環境の中にシステムが埋め込まれるような形というものにしてあります。

学生は、先ほども申しましたように、半期始まるときには自分自身のまず目標を立てます。それで授業を受けます。半期が終わったところで授業の振り返りを入力するのですが、その具体的な内容はこんなふうにしております。シラバスの授業目標を明示した上で、ここに書かれている項目について6段階の評価をしてもらうということです。ここで示しているのは何かと申しますと、15回の授業が始まることから最後までプロセスと結果を自分自身で評価してもらうというような項目にしております。例えばちゃんと最初から目標を理解して授業受けたか、実際に出席したかとか、どれだけ達成したかと。それから満足度を訊く項目があるのですが、ここも授業の満足度という訊き方ではなく、自分自身がそこで得た学修成果に対してどの程度満足していますかという形の訊き方にしています。ですので、授業の評価としての満足度という訊き方にはなっていません。これだけではなくて、その授業の中で自分が一体どういうことを身につけられたのか、それから目標の達成度を何でこんなふうに自分は評価したのかというのを自己分析してもらうような欄を設けております。ここまでは必ず書かなくてはいけない項目になっています。ですので、ここまでは学びのプロセスと達成度を自己評価してもらう。こういう項目にしているのは、実は、一つは学生と教員双方に対してですけれども、こんなふうに授業を組み立ててほしい、あるいはこういうふうに勉強してほしいというようなことが分かるような、暗黙のメッセージとなるような項目を立てているということです。

これだけだと本当に学修の自己評価だけで、これだけなのかと思われるかと思うのですが、実は従来の授業アンケート的な項目も少しだけ残しております、ただしこれだけです。授業のよかった点と改善してほしい点をチェックボックスで並べて、よかったらチェックしてね、改善してほしいのがあったらまたチェックしてねということで、何段階評価みたいなことを一切やっていませんし、また、ここはチェック一切しなくても全然構わないところになっていますので、別にここは書いても書かなくてもオーケーです。それから授業改善提案というのがあれば書いてもらうということです。それから、学生から教員へメッセージなどがあれば書いてください。例えばありがとうございましたとか書いてくれる学生が沢山いますけれども、それを書いてもらう。また逆に、そういうメッセージを書いてもらったら先生方のほうからもクラス全体に対してメッセージを書いてくださる。これは前から実はやっていることなのですが、そういうメッセージが書き込めるようにという仕組みにしております。

具体的にはこんな画面になっていまして、ここでのポイントは、授業の目標っていうのを必ず明示した上でチェックしてもらうという形にしています。そもそも授業の目標が何だったかも分からないままに「達成度を評価しろ」といっても学生は困りますので、必ず授業の目標をデータ連携させてここに表示させるようにして、そこがポイント、ちょっとした工夫になっています。

それから、この横のところを見るといろいろな情報が見られるようになっています。成

績情報、それから自己評価集計で、例えばそこをクリックしていくと、例えばこれ、そのクラスの成績の分布まで公開するように今回しました。今まではそういうことは公開してなかったのですが、自分の受講した科目についてだけは公開しましょうと。自分がその中でどういう位置にあったのか、それを見せることによって、自分がどういう勉強だったのかということ振り返ることができるだろうということにして、学内で少しいろいろ「すったもんだ」がありましたけれども、何とかここまでは認めていただきました。いや、これ、システムづくりが終わるぐらいのところで慌てて何とか了解が得られたので、ちょっと非常にあせりましたけれども何とかここまではオーケーでした。あとは自分の自己評価とクラスの評価がどれくらい違うのかといったのを見比べられるとか、そういうようなことができるようになっていきます。

そういう授業ごとの自己評価が終わった後、成績が出たところで半期全体の振り返りをしてもらおうと。これは先ほどの自分が立てた目標に対する振り返りと、それからもう一つだけ、大阪府立大学の学士課程が目指す学修成果というのを9項目定めているのですが、これを5段階で評価してもらおう。これも評価してもらおうというよりは、うちの大学がこんな目標を掲げていますよということを知る機会にしてもらいたいなという思いを込めて、こういう項目を入れています。

実際の画面はこんな感じですがけれども、ここに立てた目標が書いてあって、それに対して振り返りができるようになっていて、あとは別の項目が並んでいると、これだけです。そのときに、この横にいろんな半期全体の情報が集約されるようになっていまして、ここを見ると、その学生がどんな学びをしたのか、自分自身の学びがそこで振り返れるようになっていきます。例えば、これが半期概要で、自分の半期の成績分布、それから累積の成績分布、それから半期のGPAがどういうふうに変化してきたかというようなことまで全部見えるようになっています。さらにこちらは、半期全体で授業ごとに学修評価した自分自身の集約した平均値と周りとの平均を比べるとか、あるいはそういう項目ごとの平均がどういうふうに変化したかとか、そういうふうなことまで見えるようになって、自分自身の学びを可視化できるようにしております。

元に戻りまして、その横のところには、授業に対する達成度、成績と含めて、成績はこうだったけれども自分としての達成度はこうだったよ、その自己分析がどうで、どんなことが身につけられたかといったことが一覧になって見えるようになっております。

また、その隣のところには、先生方からコメントを書いてもらえますけれども、それが一覧になって見えるようになっていまして、こういう形で教員側からのコメントも見ることができるようになっております。

こういう仕組みを通して、ここに書いてあるように、ちょっと格好いいこと書いてありますけれども、できるだけ学びの改善を学生に促したいという目的であります。

続きまして、教員の側から見た場合の本学のシステムの話を少しだけさせていただきます

す。

教員側の画面も同じようなものですが、基本的には授業が並んでいて、シラバス、それからD oに相当する授業支援システムのリンクとか、あるいは教務学生のほうの機能もありますので、そっちのほうにリンクとか、それから学生の授業の振り返った結果が見られるようなリンクがあります。これもP l a n、D o、C h e c kの順に並べるようにしています。教員側は年度ごとにそのデータが蓄積されるような形になっております。

これが私の授業の画面になりますが、ここで教員がコメントを入力できるようになっていまして、その下のほうにいっぱいデータが並びます。成績分布ももちろん見えて、G P Cもすぐに分かるようになっています。また、部局全体の評価と自分の授業の評価がこれだけ違いますよと。私の授業の自慢は、授業外の学習時間が長いことっていうそこだけなのですが、例えばこのところを見ていただくと、平均よりも大分上がっているのは、これが授業外の学習時間です。それ以外は並みたいなものなのですが、こんな感じになっています。分布ももちろん見られますが、こちらは学生の自己評価の達成度、それからその分析、それからどんなことが身につけられたか、それから学生がどんなメッセージを寄せてくれているか。どの学生からかというのは匿名にしていますので分かりませんが、一応こんな感じで一覧を見ることができるようになっています。

教員へのメッセージというところは、学生から、本当に一生懸命授業したときにはありがたいコメントをいただけるので私はとてもうれしいのですが、時には辛辣なことを書いてくれる学生もいます。そういうのを励みにしながら授業改善につなげることができるということになっています。

それからもう一つ、私がこのシステムで工夫したのは、授業を取り出して比較ができる、自分の授業だけですけれども比較ができるようになっています。例えばこれ、私が教えた実験の授業、4クラス、2年度にわたっての4クラスを取り出して比較するというようなことが簡単にできるようになっています。そうするといろいろなデータが出てきます。これは授業時間外の学習時間ですが、2012年度と2013年度で2クラスずつあります。2012年度に比べて2013年度は授業外の学習時間が延びているということが分かります。これはもちろん、私自身がそうなるように仕向けたからであります。その結果として、確かにこういう結果が得られたということで、この点、非常に満足だなというわけです。実際の内訳を見ると、一番右側の紫のところが3時間以上学習したという学生になっていまして、非常に長い時間勉強している学生も増えているなということが一目瞭然ということになっています。こういうのは簡単にデータがシステムに蓄積されていますし、ボタン一つでこういうデータがざっと出てきますので非常に便利、少なくとも私に便利になるように実はつくっているのですが、これだけ勉強させられた学生はどう思っているのかというと、実はこういうのも一応訊いていまして、宿題の量についていいと思っているか悪いと思っているのかっていうのを訊いた項目、これも見えるようになっていますけれど

も、水色のほうが「よかった」、赤のほうが「特に改善してほしい」ということで、2013年度のほうが若干前のクラスに比べて文句言う学生が増えているかなと思いますけれども、これぐらいは勉強してもらわないと、と私は思っていますので、別にこんなのは気にしない。この程度の変化だったら別にいいかなと個人的には思っております。こんなものを見ながら授業の改善を我々はすることができるというわけです。

というわけで、教員については教育についての気づき、自己改善を促すようなものになっています。それと同時に、学生と教員との間の相互理解、あるいはコミュニケーションの促進を一つは目的にしています。先ほどの教員コメントを書き込むところもそうです。それからそれ以外にもちょっと、今日は話をはしりますけれども、学生アドバイザーの先生方にもこういうデータをお見せしていて、その先生方が使う機能も一緒に載せていますので、そういうときにもシステムが使えるようにということで、学生と教員の間、別にこのシステムで絶対にコミュニケーションをとらなくちゃいけないかという、そんなことは全くありません。あくまでもツールとして使うことができますよというふうにしております。

最後、うちの本学のポートフォリオを見ていただいた上で、そもそもポートフォリオって何なの、どういう意義があったのということをちょっとお話最後にさせていただきたいと思います。

そもそもポートフォリオって何なのって思われる方いらっしゃるかと思いますけれども、非常に単純に言ってしまうと成果物を蓄積したもの、あるいは作品集などと言われています。これ、たまたまですけれども、昨日うちに帰ったら、うちの息子がこんなものを持って帰ってきていて、ああ、これだと思ってばちりと写真を撮ったものですが、うちの3年生の息子がその1年間の多分図工の時間でつくった作品とか絵なんかをバッグに入れて運んできたものです。ポートフォリオのポートって、もちろんポータルとかと同じで運ぶっていう意味がありますので、まさしくこれポートフォリオですね。運べる作品集なわけです。ただ、ポートフォリオの意味っていうのは、いろいろな分野でいろいろな意味があって少しずつ意味が違いますけれども、教育の分野に限って言いますと、単に作品を集めただけ、詰め込んだらそれがポートフォリオって言うていいのかっていうところはいろいろ、それだけではだめだろうということは教育の分野では言われております。

どういうことが大事なのか。少なくとも高等教育の中ではそれはポートフォリオっていうのはどういうふうに捉えられているのかっていうことを知っていただくために、ちょっとこんなものを引用してみました。これは2008年の「学士課程答申」の中で述べられていることですが、「学生が自らの学修成果の達成状況について、整理・点検するとともに、それを活用する仕組みとしていわゆる学習ポートフォリオ導入を検討してください」と、こういう話になっています。ここでのポイントは、整理して点検する、そのためのツールですね。学生も単に集めましたじゃなく、点検というか、ここで振り返ることが

できるようにしないといけないよということがポイントです。

それから、ポートフォリオについてはもう一つ、ティーチングポートフォリオについてもお話がありまして、これも同じようなものですが、教員自身のポートフォリオみたいなものを活用しなさい。ちなみに先に言うておきますと、本学のポートフォリオっていうのは、いわゆる高等教育の中で言われているティーチングポートフォリオとは少し違いますけれども、それに近い形のものになっているかとは思っております。

それから、これはもう少し最近に出た2012年の「質的転換答申」と言われているものですが、ここでも同じように、途中からですが、「特に成果の評価にあたっては」ここですね、「成果の評価にあたっては、学修時間の把握、学修行動調査は・・・学修ポートフォリオ等測定手法を用いて・・・明確化する」と書かれています。要するに、学修時間の把握、学修行動調査、それからどんな成果があったか、そういうところが大事だということになっています。2012年のこの答申が出たらすぐさまですけれども、これ、2011年度の、先ほども出てきましたけれども、「教育内容等の改善状況について」という調査の中でこの項目が即座に反映、新しい項目として取り入れられています。2011年度ということは2012年に調査が始まった項目になりますけれども、その中で学修時間、学修行動の調査の方法としてポートフォリオを使っているか、それから成果の把握の方法としてポートフォリオを使っているかというところで項目が上がっております。学びでの大事なことは学びのプロセスですね。学修時間なんかもそうですけれども、そのプロセスとそれから成果をどうやって把握するか、そこの中でポートフォリオをどう活用しているかということが問われているということになります。

こういうふうな意義づけを高等教育の中で今与えられているわけですが、実はこれ、ポートフォリオにもともと二つの大きな役割があるということと関係しています。ポートフォリオについてよく言われている大事なことは、ポートフォリオは単に作品を集めるだけではなく、そのプロセスを可視化することによって振り返りと気づきを促す。そういうことが大事ですよ。それがなかったら意味がありませんよというふうに言われております。それから、エビデンスとしての成果を公開する。これはいわゆるショーケース・ポートフォリオなどと言われているものがそうなのですが、私はこんなこと、作品がくれる人ですよということを見せるためのポートフォリオとしての役割というものもちろんあるわけです。ただ、大学の中では、そういう成果っていうところをもちろんやっているところもありますが、むしろ達成度の評価のような形でその成果を学生に自己評価してもらってというシステムがかなりありますので、そういう達成度の評価といったのもエビデンスとしての成果の公開といったところのほうにも少し関係しているかとは思います。こういう二つの役割がもともとポートフォリオというものに備わっていて、それがこういう高等教育の改革の流れとちょうどマッチしているということになるかと思えます。

ちなみに本学のeポートフォリオの特徴を、ちょっとだけそれと関連で述べさせていた

だと、成果の達成度の公開っていうところはちょっと非常に力点を置いてなくて、むしろ振り返りと気づきを誘発するっていうところに力点を置いているというところが大きな特徴になっております。それから、普通、ポートフォリオを導入されるところは、学生の学修ポートフォリオという形で導入されているところがたくさんありますけれども、うちは、学生のポートフォリオだけではなく教員のポートフォリオとしても同時に成り立っているということが非常に大きなポイント、特徴になっています。それから、このポートフォリオは在学期間あるいは在職期間全体を通じてのポートフォリオということで、ポートフォリオ、例えば授業単位でつくられるポートフォリオってたくさんあるわけですね。15回の授業の中で学生がポートフォリオを作成し、その中で自分自身のことがこんなふうになるようになった、あるいはそこから振り返ってどうだったということを見られる、そういう授業単位のポートフォリオもありますけれども、ここではそうではなく、4年間、あるいはうちでは6年間、獣医もありますので6年間、そういう期間を通じて、学びのプロセスを追いながらどういうふうに分が成長していったのかというのをまとめるようなポートフォリオとしてシステムをつくっております。

先ほども言いましたように、これらのポートフォリオの二つの役割というのは、実は高等教育で言われていることと非常に深い関係があつて、特に教育における質の保証、最近叫ばれていますけれども、これと非常に高い親和性を持っていると言っているかと思ひます。

皆さんよく御存じかと思ひますけれども、私なりにちょっと質保証についてまとめさせていただくと、昔ですと、設置基準があつて事前規制があり、入学試験で学生の質がほとんど確保されているという状況だったわけですが、大綱化・自由化によって規制が緩まったことに伴い、自己点検あるいは第三者評価をすることによって改善していくということが非常に大事だと言われるようになってきました。こういうことをして質保証をしていけということですね。それからユニバーサル化に伴って多様な学生が入ってくるとなると、出ていく学生の質を確保するためには、入り口ではなくむしろ出口のほうで質を見ていかないとはいけませんよということが言われているわけです。

これは、私なりにちょっと乱暴な解釈ですが、製品の製造プロセスなんかで言われていることと対応させて考えると分かりやすいのかと思ひましたが、製品をつくる時の品質管理、PDCAのサイクルとして品質管理をしていこうっていうのが左側に対応しているかな。右側のほうはいわゆる品質保証、できたプロダクトがちゃんとした製品であるっていうことを保証しますよっていうこととしての品質保証、そういう品質管理と品質保証っていうものが大学教育における質保証として今求められているのかなと。ただ、私自身は、学生をプロダクトとして捉えるという工業製品みたいなものとして捉えるという捉え方は非常に乱暴だと思ひますので、こういう評価だけでいいのか、こういう安易な捉え方で本当にいいのかっていったところは多くの先生方も多少疑問に思われる

かと思しますので、そういうところをちょっと割り引いて見ていただければと思いますけれども、今言われているところを解釈すると、こういうふうに捉えると分かりやすいだろうというふうに御理解いただければと思います。

そういうふうなところで今の高等教育、大学教育の中でいろいろとこういうことが言われている。そのときにポートフォリオっていうのはそういうPDCAのサイクルを学生・教員にも促すということが出来る点で非常にありがたいツールであるし、そういう学生の学びの達成度を評価して見えるようにするっていうことはある種の品質保証にもつながるということになりますので、非常にポートフォリオっていうのはそういう今言われている質保証と非常に親和性が高いというふうに考えることができます。

じゃあ、これ、とりあえず我々としては学生・教員個人としてのPDCAのサイクルを回す手助けになるようにという形でつくってはありますけれども、これのデータを大学全体として見れば、大学全体としてのPDCAのサイクルを回すときの非常に重要な資料になるだろうということで、大学全体としてPDCAのサイクルの中にこれを組み込むこともできるというわけで、本学ではこれをどういうふうに活用しているか、どういう意義があるかといったところをまとめてみますと、一つは、最初に出したように、教育・学習における自己改善支援ということはもちろんあるわけです。ただし、これは個人個人にその使い方がる程度任されているという点で、どれだけ効果があつたのかということをつかむのはなかなか難しいので、これでこれに非常に役立ちましたと大手を振って言えるようなものでは残念ながらありませんけれども、それ以外にも、少なくとも質保証の仕組みの一つとして活用することができるでしょうということで今やっております。

それからもう一つは、途中にもちょっと述べましたが、学内での教育・学習情報をできるだけ可視化していくという意味でこのシステムは役に立っているかなと思っております。少しずつ詳しくお話したいと思いますけれども、まずそもそも授業の評価から学生の学びの評価というふうに転換したことでいろいろなデータが得られるようになってきます。学びを評価するわけですので、例えばこれ、シラバスの評価とかっていうのを学生ごとに集めても何の意味もありませんけれども、自分自身の学修の自己評価を学生ごとに集めるといろんなことが分かります。個人個人がどう周りと違うのかということも分かりますし、当然、例えばいろんな集団を持ってきて、その集団の学びを比べることもできるようになります。例えばこれですと、ある学類の学生の平均と全学生の平均を比べると、この学類の学びっていうのは相対的に自己評価が低くなるような学びをしているなということが分かりますし、こちらですと、こちらの学類の学生の満足度は非常に高いのに対して、でも、授業外の学習時間非常に短いよね、学習時間短いのに満足度高いってどうなっているのだろう、何か理由があるのかとか、そういうことを考えるきっかけになるかと思えます。

これは当然匿名のアンケートではありません。誰が書いたのかってもちろん分かっている

ます。成績データともリンクすることができますので、その任意の集団を、好きな、例えば別の学生調査をやって、こんな結果を出している学生の集団だけを取り出してっていうようなこともやろうと思えばできるようになっておりますので、いろいろな集団をいろいろな観点から評価できるようになるかと思っています。

また、これもある学類の学生を取り出して、1回生のときのそれぞれの科目ごとにどのような学びをしたかというのを、全学の平均とその学類の学生の平均と比べて、例えばこの学類の学生だと教養はあまり勉強していないのではないのかなと考えさせられたり、専門はすごく勉強しているけれども何かとても大変そうだなというのが伺えるデータだったり、そういうことがいろいろ分かってきます。

それから、これは少し詳しい説明が要るかと思うのですが、これは2012年度の前期の1回生のそれぞれ学生ごとの自己評価の個人個人の平均値、例えば10科目とったら、その10科目の個人としての平均値を項目ごとに出して、その相関を見たものです。左側並んでいるもの学修のプロセスに主に相当しているものだと思ってください。上に並べているのがその成果、結果としてどういうものが得られたのかっていうものを並べていると思ってください。インプットに対してアウトプットがどうかというふうに考えてもらいたいと思います。その相関を見ています。特に半期のGPAと相関をまず見てみますと、悲しいことと言いますか、半期のGPAと相関を持っているのは何かというと実は出席率はかなり高い相関を持っていることが分かります。それはまあいいにしても、ほかとの相関があまり見られないわけですね。特に授業時間外の学習時間と成績が相関してくれているとうれしいのですが、なかなかそうはなっていない。そうすると、成績評価っていうのは一体何なのか、何を我々成績評価しているのかっていうことに対して疑問を持たざるを得ないということで、今、それがちょっと課題となっています。

これは、実はこれだけではなく、ほかにも本学では学生調査をいろいろやっているのですが、その中でもどれだけ成績と相関、何が一番強いかというとやっぱりどれだけちゃんと授業に出ているかといったところが一番強く出ていて、ほかっていうのがあまり効いてないということがよく分かっていて、ちょっとそこら辺問題じゃないかということで、今、学内でちょっとどうしようかということになっています。それから今、盛んに言われている授業時間外の学習時間、これがどういう影響を及ぼしているのかということなのですが、さっき申しましたように、半期GPAとあまり相関がないということは残念ですが、ただ、幸いなことというか、授業各回の理解度について言えばそれなりに相関がありますので、毎回ちゃんと勉強しているということは当然大事だろうなということはこれから分かるわけです。

というわけでして、そんなことがこういうデータを集めると分かってきますよということで、学内の質保証の観点から、PDCAのサイクルを回すといった上で非常に貴重なデータになってくるかなと思います。

それから、情報の可視化ということで言いますと、先ほど途中でも言ったように、成績分布、それからG P Cを受講科目については学生に見せるということをしていますし、それから教員についてもこういう学修情報は公開していますので、今までほかの先生方の成績分布とかあまり分からなかったのですが、今回からはちゃんとシステムにいけばすぐに見られるという体制にしております、これは経年的に授業が行われていく上で、前の授業が一体どういう学びをしたのかというのをチェックしておきたいと思ったらこういうところを見て、あるいは成績分布などを見ながら後の授業を組み立てられるというような形にしております。

それから、皆さんのところはちょっとお出ししてないのですが、これ、学生のアクセス状況をちょっと見ていまして、昨年度と今年度、今年度は青のほうになっていまして、大分学生に対しては浸透してきたかな、このピークになっているところは成績情報が開示されるところになっていまして、そういうところで非常にアクセスが増えている。特に昨年度と今年度は大分アクセスが多くなっている、学生数が増えているということ以上にこれはアクセスが多くなっておりますので、それなりに学内的にはこのシステムがあるということは浸透してきたのかなというところにはなっております。

というわけで、私の話をまとめるとこんな形だったわけですが、なぜやめようと思ったのかと言いますとティーチングからラーニングへ視線を転換したかったということ。どのようにという、I C Tアクションプランを立てました。学修の自己評価を核としたポートフォリオ、学生と教員両方のポートフォリオで、役立つのかという、こういうこと（質保証、学習・教育情報の可視化）にも役立っていますよという話でした。

以上です。御清聴どうもありがとうございました。

質疑応答

司会： 星野先生、どうもありがとうございました。

先生の授業に対する学生の授業評価で「分かりやすさ」で非常に高い評価を得られていた理由について、今、御講演を伺っていてよく分かりました。非常に早口でお話になりますけれども、ものすごく分かりやすいということです。ありがとうございました。

私のほうから事実確認を3点させていただきたいと思います。その後、フロアからの質疑応答にさせていただきたいと思います。

まず1点目は、従来の授業評価アンケートでも顕著ですが、なかなか入力しない学生が必ずいると思います。そういう学生に対してどう対処しておられるのかということです。

第2点目は、今、先生から御紹介いただいたシステムについては、おおむね学士課程の学生が例として挙がっていたと思いますが、大学院生も同じようにしておられるのかということです。

それから3点目ですが、学生アドバイザーとか、あるいは授業担当教員がこれを自己の授業改善に生かすという趣旨でお話になったのですが、例えば、指導教員が自分のゼミ生が授業に出て学習しているか、あるいは理解しているかとかについて、あるいは教務担当事務が学生の両親から問い合わせがあつて、授業に出て聞いているのかとか、そういうことが間々あります、そういうときにこのシステムを使って、どの範囲まで閲覧できるのかということです。以上3点について、教えていただきたいと思います。

星野先生： はい。どうもありがとうございます。

まず1点目、入力しない学生に対する対応。もともと入力率が悪いってということから始まって、今はどうなのってこと、興味ある方たくさんおられるかと思うのですが、正直に申しまして、最初、1回生前期、一番初めにやったときにはかなり入力率は高かったのですが、やっぱり年々落ちていくというか、学年が上がるに従って落ちていく。それから年度を経るに従っても若干落ちていっているかなといったところがもちろんあつて、そういう意味でいうと、もともとの発端から言うと、その部分に対して今満足しているかというところと全く満足していません。入力率もそれなりにしかないというところになっています。

それに対してどうしているかということで言いますと、できるだけ入力率向上をさせたいということで、当初からまずそういう懸念はもちろんあつたので、入力していない学生に対してシステムの自動的にメールが飛ばせるようにしております。何々君、何々様っていう形でメールが自動的に、「何科目中まだ何科目しか入力してないので、この日までにちゃんと入力してね」というようなメールを飛ばせるようにしております、時々そういうのを促すようにしています。学生にとってはうっとうしいだけみたいになりますけれども、そういう形で対応しています。

それから大学院生について。それから、実はこれ、うちでいうと学域・学類制にしたので、学部生もいてそれから大学院生もいるわけですが、これ、導入しているのは新しくなった学域・学類の学生だけです。学部の学生とそれから大学院生については、こういう仕組みはそのままは使ってはいません。ただし、授業アンケートっていうのはやっぱりやらないといけないということがあるので、従来の学部生と大学院生につきましては、この学修自己評価というか、「授業ふり返り」という呼び名で私どもはやっているのですが、その部分については授業アンケートのかわりにそこだけ入力してもらうという形、システムの的にもそれだけしかできないような形になっております。ただし、当然そのデータが蓄積されていって自分で見られるという部分はほかの学生と全く同じですけれども、そういう形での運用にしている、半期の自分の目標を立ててとか、そういうのはもう大人なのだからそれぐらいは自分でやってよねっていうような意味も込めて、そこは割愛しているということになります。

それから、アドバイザーの先生方が見られるのはどこまでかということだったかと思う

のですが、かなりのところまでは見られるようにしております。その学生がどんな目標を入力したか、どんな振り返りをしたかといったところは見られます。ただし、授業科目ごとにどんな回答したかまでは見せてはいませんが、その平均値としてどんなふうになっているのかといったところまでは見せています。

それから、毎日どれだけ出席したかというところまではさすがに、出席管理システムも導入していますけれども、必ずしも使っているわけではないので正確なところも把握できませんし、それを先生方にお見せするようなことはしていません。半期で自分の出席率がどうだったという評価のところはもちろん見えるようにはなっていますが、授業15回の途中でというようなところまではサポートはしていないといったことになります。

以上です。

米谷： 刺激的で挑発的な話でした。私も関西地区 FD 連絡協議会のワーキンググループで授業評価のこういう問題について検討していたのですが、このようなお話をお聞きできなくてすごく残念に思いました。というか、私のほうでは大学の次の教務情報システムの更新に当たっておりまして、今、先生が紹介されたそのものを入れてしまいたいぐらいの気持ちにもなってしまいますが、それについて少し幾つか教えていただきたい。

まず一つ目は、このシステムを最初立ち上げる際には、情報基盤センターですか、情報センターと共同で、なおかつ業者とも多分タイアップされてやっていらっしゃったと、時間もかなりかけてらっしゃいますが、これは独自のシステム、それとも何らかのパッケージですか。

星野先生： 完全な独自システムです。

米谷： そうですか。他大学への移植は不可能と考えられますか。

星野先生： いや、そんなことはありません。このシステムそのまま、ほぼそのままの形で別の大学でもとりあえずまず入れてみましょうと、ほかの大学で入れている例があると聞いています。

米谷： 二つ目の話としては、これの大学認証評価等への活用の際に、これを全ての教員の、あるいは全ての学生のもを吸い上げて統計をとったり、フィードバックしたり、という機能は最初のときに組み込まれていたのでしょうか。あるいは、その活用はどうかということについてご教示ください。

星野先生： これをどう集計してどう出すかといったところまでは、システムの中ではサポートしていません。それは、そもそもどういう形で出すのがよりよい形なのかというの

が、システム構築したときに見えていなかったというのももちろんあるわけですので、そういう意味では、何かのデータがすぐにぽんと出てくるというような形には残念ながらありません。ただし、データ自身は全部吐き出せるように当然なっていますので、そのデータを私自身も日々扱うわけですが、そこから自分で処理の仕方を考えて処理するといろんなデータが出てくるというような形にしております。

米谷： 三つ目でございますが、こういったものを、先生が、今、講演の中でお話されたように、やはりその学修支援で、教員あるいはチューターと個別の学生が個々に出会って、今までを振り返って今後に生かすという局面がたくさんあると思います。そういうときにすごく役立つシステムだと思っていいです。神戸大学では今、GPAの活用、あるいは学修支援の問題についても今後は全学的にやっていかないといけないのですが、こういうことについて教員と学生が、例えば面談のときにこれを利用しながらやるとか、あるいは教務員とか教務委員会の中でこういうようなものを学科単位とかコース単位で検討するとか、あるいは、私もある大学で実際見たのですが、1人の学生に関するいわゆるカンファレンスですね、この学生、今こんな状況だ、学生はこういうふうにしようっていうようなことをこういうものを見ながらやっていくような、学科単位のコース単位のカンファレンスもあり得ると思うのですが、そういう活用の状況を教えていただけますか。

星野先生： はい。正直に申しまして、その学生アドバイザー、担任みたいなですね、のところでどれだけ活用しているかというと、ちょっと私自身まだデータをきちんと把握していないのでちゃんとしたことは言えないのですが、ただ、本学のそもそもの学生アドバイザーがどれだけうまく機能しているかといったところがちょっと疑問なところがありまして、もちろんすごく活用されている学部・学科はあるのですが、そうでないところもあって、非常に差が激しいかなと感じています。活用されている先生方がいらっしゃるのももちろん私は知ってはいるのですが、全学的にそういう場面でシステムを活用してうまくやられているかというと、必ずしも現状ではちゃんと使えてはいないことのほうが多いのではないのかなというふうには思っております。ただ、使おうと思ったらもちろん使えるようなシステムにはなっています。

あと、それ以外に例えば教務委員会とかそういう話がありましたが、これについては、教務委員会のほうでは権限を与えていないので見られません。ただし、うちの大学でいうと、学域長・学類長レベルの先生方には、先ほどの学生アドバイザーと同じ権限で見られるような形にしています。ですので、学生の担任である学生アドバイザーの先生方、それからそういう御偉方の先生方は見るようにしております。

藤田機構長： 貴重な御講演ありがとうございます。

神戸大学でもですね、前田先生を中心にアンケートの話をしていただいているのですが、絶望的な回答率になっておりまして、恐らく次、認証評価を受けるときにはですね、今日、最後のほうでおっしゃった観点というのはさらに求められるだろう。神戸大学は、制度は割合整備されているけれども、それをきちんと大学全体で把握しているかという点が劣っているという評価なのですね。ですから、できるだけ早い時期にこういうポートフォリオみたいなものを導入したいと思っております。

特にこの授業評価アンケートとそれからこのポートフォリオですね、自分の学習の振り返り、その違いで一番工夫されている点というのがもしございましたら。というのは、今ちょうど教務システムを変えようということで、今、中身の検討をしております。かなり遅い、この段階でこのポートフォリオを導入するとかなり難しいだろうと思うのですが、考えられるのは、その授業評価アンケートをそのまま残しながらそれをポートフォリオとしても利用できるような項目を設定できないかということになるかと思います。その点で、一番工夫された、考えられた点が、もしあれば御教示いただければと思います。

星野先生： なかなか難しい御質問です。

まず、中身的な話で言いますと、工夫した点で言えば、途中でもお話ししましたけれども、こういうポートフォリオを一般的に私どももいろいろな大学を参考にさせていただいたときに、学修の成果の達成度の評価として用いられているところが多々あって、そういうのも非常に参考になったのですが、私自身は、途中でもこれも言いましたように、達成度だけではなくプロセスを見るといったところも大事だろうということで、そのプロセスから達成度までというのを評価項目にしている、そこが私にとっての工夫した点ということになります。

他システムとの関係のこととちょっと関連することを申しますと、本当のことを言えば、達成度の評価のところ、うちは授業目標があるのでその目標に対してどれだけ達成できたかっていうだけ、一回一つしか聞いてないのですが、今後であれば、例えば、我々教務学生システムでシラバスを入力するときに、授業の目標を入れる欄が一つだけしかありませんけれども、当然のことながら、そこに、例えば達成目標を例えば3項目だけ必ず挙げて入れてもらうみたいなことにすれば、この三つの目標に対しては「こんな評価ですよ」といったことができるようになるので、本当はそういうことができたならよかったのにと常々思っていました。ただ、そうすると、そういうシステムにしようと思うと、教務学生システムの方の大規模な改修も必要になりますし、先生方のそもそも今のシラバスのフォーマットでいいのかといえ、シラバス改革、シラバスを通した教育改革ということにもなるかと思うので、非常に話が大きくなる。本当はそこまでやっても私はいい、やれるのだったらやりたいとは思いますが、どうしても現実との妥協というのはどこの場面でも必要になってきます。現実には、なかなか身動きがとれないというところもあり、我々

のやっている取り組みでも当然現実との妥協というのはいろんなところで起こってきます。

また、ついでに申しますと、本当はこれ、「学習・教育支援サイト」という形で何とかまとめているのですが、実際にはもっとポータルのところから学生の学びのことを考えたポータルをつくってあげるべきだと個人的には思っていて、それができていない現状について、私は今、不満というか、何とかしたいなというふうに個人的には思っています。しかし、そこまで手が回っていないというか、私の担当でもないところなので、意見は言いますが、それでも、そこまでできていない。次のシステムの更新のときにどこまでそこができるかというところと甚だ怪しいところがあります。少なくとも考えるポイントとしてそういうポータルとの位置関係、立ち位置、それからシステム間どういうふうに連携させていくかということは非常によく考えたほうがいいと個人的には思っております。使い勝手の悪いシステムがばらばらにたくさんある、それが本学の状況ですので、それに何とか対応したいということでの悪あがきがこの「学習・教育支援サイト」という形でのシステムということになっております。

質問者1： 貴重な御講演ありがとうございました。

3点お聞きしたいのですが、最初に、学生の入力率が高くないというお話だったのですが、それに対するサポートはされているということですが、具体的に何パーセントぐらいの学生が入力していないのかということ。

それからもう一つ、学生だけではなくて、教員の側への抵抗がなかったのかなというふうにちょっと、どの程度運用されているかということ。

それから最後に、相関分析というか、先生が残念だったというお話だった、出席率と半期GPAのことですけれども、単純に考えますと、出席率が低い学生というのは当然成績が悪いわけですね。ある程度高い学生とGPAを見てみるとそれほど無相関であって、低い学生と高い学生とのいわゆるアーチファクトみたいな形で高い相関だったのかなというふうに思いましたけれども、いわゆる線形として捉えて分析されていると思います。線形ではなくて、もしかすると違う非線形基準とか把握されて分析されたらまた違った結果になるかなとは思ったのですが、その点いかがでしょうか。

星野先生： まず入力率について、本当は出したいくない。数十パーセントとかその程度です、現状では。まだまだ。今後はこれ、数値目標を掲げられていたはずなので何とかしたいといけいないので、来年度はちょっと対策を考えたいなとは思っています。

それから教員の側、これはシステムを導入するときにもいろんな先生方からいろいろ言われたりはしましたが、今でももちろんいろいろ言われますが、ただ、これを行っていることは、少なくとも教員の立場から見たときに、実は従来とほとんど何も変わっていません。何かというと、要するに授業アンケートのかわりとしてリプレイスしただけで

すね、教員の側から見ればね。これまでにやってきたのは、アンケートして返ってきたものを見てそれに一応コメントを入れてください、ということで先生方をお願いしてきました。従来からずっとそういうことをやっていたので、もちろんそれで全員が入れてくれているかというところももちろんないわけですが、ただ、やっていることは全く一緒なわけです。ですから、何か負担が増えたかというところ、教員の側に対する負担は全くと言っていいほど増えていないわけです。むしろ、すぐ反応が見えるとか、あるいは情報が蓄積されているので、前とすぐ比較しやすいとかっていう、やることは同じだけれども見えることが多くなったという点では、教員にとってはメリットなのかなと思っていますので、そういう意味で何か文句を言われるというか、負担が増えたとかって言われる先生はいらっしゃらないので、先生方の関わりとしては従来と同じかそれ以上というふうに思っているのかなとは思っています。

それから、相関については済みません。ちゃんとした分析まではしてなくて、単に相関係数見ただけです。ですので、もう少し細かく見ないといけないのは確かです。ただ、先ほども申しましたように、ほかの学生調査のデータなんかでも同じような傾向が出ていますので、まあまあ傾向としてそういうことが言えるのかなとは思ってはいますが、また先生の御意見を参考にもう少し詳しく見ていきたいなと思います。ありがとうございました。

近田：　じゃあ、具体的なことをちょっと教えていただけますでしょうか。

先ほどお話にありました、異なるシステムの間をどうすり合わせていけばよいでしょうか。既存の教務学生システム、それから授業支援システム、それから今回おつくりになりましたこの学習支援ポートフォリオのシステム、これを全部同じ業者が統合的につくっておられるのでしょうか。

星野先生：　いや、違います。教務学生は全く別です。それから、それ以外については実は一つの業者で見てもらっています。基本的には本学、どこでも多分似たようなものだと思いますけれども、基本的にいろいろなシステム間のデータ連係をする仕組みが当然備わっていますので、そのデータ連係の仕組みを活用してシステム間の連携をとってはいます。ただ、システムとしての連携ということのほかには考えなくてはいけないのは、ユーザーの立場としてそれぞれのシステムがどううまく連携しているのかのほうは私にとっては重要で、それがまだまだ本学では十分ではなく、例えば機能的にもいろいろなシステムが立ち上がっちゃうと、それぞれで機能を持ってしまうっていろんな重複した機能が当然あるわけですね。そうすると、ユーザーはどれを使ったらいいのか迷うし、そのどれを切り捨てるという意味決定は、誰がしたらいいのかというのも非常に曖昧です。そういうこともあって、2年後にはまたシステムのリプレイスを迎えるので、そういうユーザー

にとっての使い勝手みたいな面できちんとしていかないといけないということはもちろん課題としてあがっています。ですので、ぜひそういうところも注意してシステム間のことを考えていただくとよいのではないかなと個人的には思います。

司会： では、私から一つ質問ですが、最後のほうで受講科目の成績分布、G P C公開とおっしゃいました。これをやっていると、当然、同一授業科目名の中で著しく成績分布が違うという場合、学生の間で問題視されます。特に先生御担当の物理とか数学とかでは、教育内容を標準化しやすい分野ですから、そういう問題が大きいのではないかと思います。教員の間で調整とかなさっておられるのか、あるいは、まだしていないのか、教えていただければと思います。

星野先生： はい。本学において非常に大事なところになります。なぜかと言いますと、本学、学域・学類制で、比較的大くくりで学生をとって、その後専門に少しずつ分かれていくという体制にしています。それで1回生の段階では学類単位でほとんどの学生はとって、その後、その学類の下の課程というところに配属されていくのが2回生からということになります。そうすると、自分が2回生のときにどこに行きたいか、行くかというのは、それぞれの学類、課程ごとに考え方がいろいろあるのですが、当然成績なんかも含めて考慮して、行く課程を決めるというようなことになります。

そうすると、G P Aを参考に、成績を参考にということになりますと、当然のことながら1回生のときの特に共通教育の部分が大きいですが、成績の評価の仕方が違うと、特に同一科目名に対して評価の仕方が全く違うとなると、学生から当然文句が出てくるわけですね。現実、文句が出てきます。当然、それはあるわけですね。

こういうシステムを導入することによって、当然、先生方にとってもどれぐらい違うのかっていうのが明確になりますので、その気があればほかの先生の分布も分かります。特にそういう課程配属、本学で呼んでいる課程配属のときに問題になるので、我々としても当然ここは対応しなくちゃいけないということで、それぞれのデータを持ち帰り、それぞれの科目ごとに調整をしてくださいという形で、私の高等教育推進機構が共通教育それから専門基礎教育の担当になっていますけれども、その部分で、例えば特に英語なんかもそうですね、特にネイティブの先生も大分増えました、そうすると、しかもクラスがサイズ小さくしてすごく増えましたので、成績分布の違いというのは学生にとって非常に大きな問題になります。ですので、そこら辺もできるだけちゃんとするようにということで、組織としてできるだけ対応していこうという形で現実にやりつつあるといった状態です。

司会： ほかに御質問等ございませんでしょうか。

特にございませんようでしたら、これをもちまして、F D講演会を終了させていただきます

たいと思います。

星野先生、本日は本当にありがとうございました。

大阪府立大学
OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY

2015年3月18日
神戸大学

授業評価から学修自己評価へ －大阪府立大学eポートフォリオの取り組みを例に

大阪府立大学 高等教育推進機構 共通教育推進センター
高等教育推進機構 高等教育開発センター

星野 聡孝
✉ a_hoshino@las.osakafu-u.ac.jp

大阪府立大学
OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY
高度研究型大学
～世界に翔く地域の信頼拠点～

1883年 獣医学講習所 設置
1949年 浪速大学（のち大阪府立大学）
大阪女子大学 設置
2005年 大阪府立大学・大阪女子大学・
大阪府立看護大学 統合法人化
2012年 7学部28学科→4学域13学類へ
全学でeポートフォリオ導入

学生数：約8,000名
教員数：約700名
(高専を除く)



大阪府立大学
OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY

1. 背景と経緯
2. 本学のeポートフォリオ（学生）
3. 本学のeポートフォリオ（教員）
4. ポートフォリオの意義

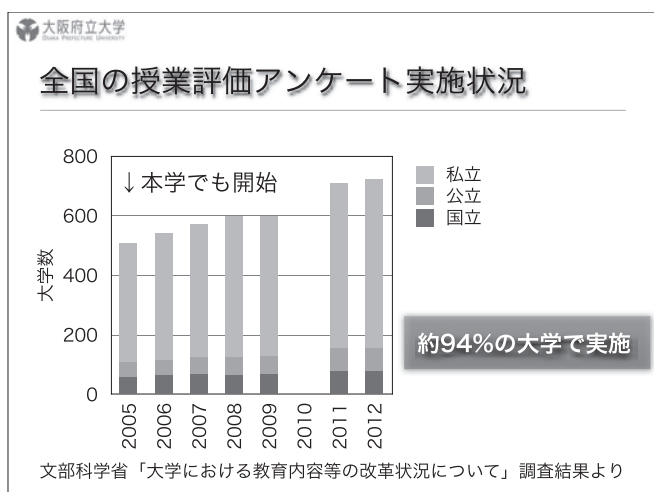
大阪府立大学
OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY

発端（自己紹介も兼ねて）

2005/4
大阪府立大学 総合教育研究機構（物理学）に着任
（高等教育開発センター設置）

2007/4～
高等教育開発センター所員

2009/4～2011/3
高等教育開発センター主任
（現在は、副センター長）



Webでの回答率の低下

対応策：

- ・中間アンケートの実施（授業期間内で授業改善を）
- ・紙でのアンケートの試行実施
- ・携帯電話によるアンケートの試行実施

やっでは見たものの...

本学における「授業アンケート」の諸課題

- ・授業評価中心
 - ・学生から評価される事への抵抗感
 - ・満足度のみが注目されがち
- ・上手く活用する事が難しい
 - ・回答率の低下（webでの任意回答）
 - ・教員個人でのデータ分析が手間
 - ・部局によって異なるアンケート項目
- ・学生への直接的メリットがほとんど無い

私にとっての「授業アンケート」

- ・授業アンケートは授業改善に有益
- ・学生の学びを知ることが、より大切
 - ・満足度が高ければ、よい授業なのか？
 - ・期末試験の点数だけで、学びを評価できるのか？
- ・継続的にデータを蓄積し、ふり返ることが大切
 - ・でも、それって大変...



学生にも教員にも役に立つ新たな仕組みを作れないか？
授業アンケートは止めてしまおう！

抜本的見直し案

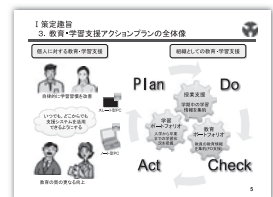
- ・2009年7月 全学の「教育改革専門委員会」へ提案

(従来)	(見直し案)
学生による授業評価	学生による学びの自己評価
回答残らない	回答蓄積・閲覧可
アンケート	ポートフォリオ
教員のため	学生自身のため

TeachingからLearningへの視線の転換

「ICTアクションプラン」策定

- ・2010年7月 学長委嘱による検討委員会の立ち上げ
 - ・学術情報センターと高等教育開発センターを中心に
 - ・ICTの教育・学習への活用と促進を検討
- ・2011年5月 策定



ご興味のある方は...

学術情報センター年報「情報」

http://www.osakafu-u.ac.jp/data/open/cnt/3/6400/1/joho18_all.pdf

「ICTアクションプラン」3つの柱

- ・授業支援
 - ・LMS (Moodle)、出席管理システム（名工大開発）
 - ・継続的に機能開発
- ・学習・教育自己改善支援
 - ・本学独自のポートフォリオシステム
- ・個人に対する支援
 - ・インフラ、ハードウェア、ソフトウェアの整備
 - ・基盤技術の調査・研究

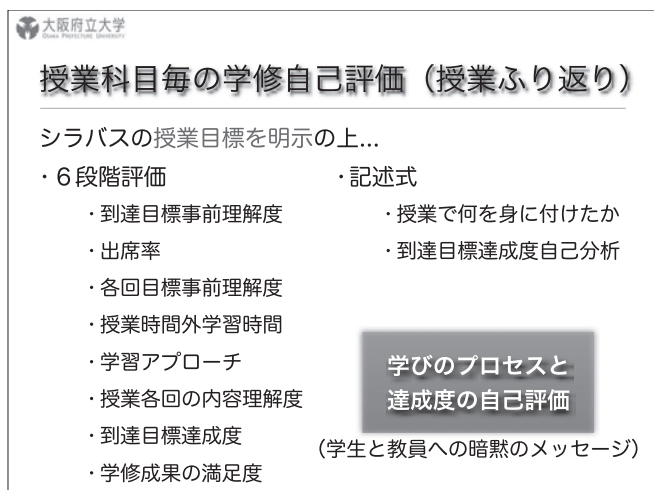
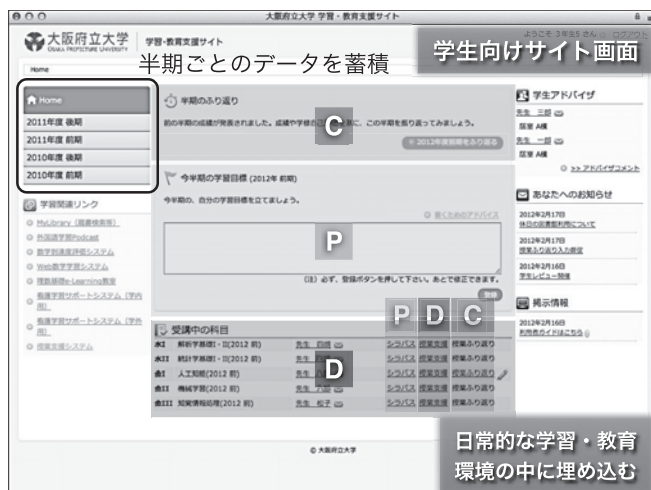
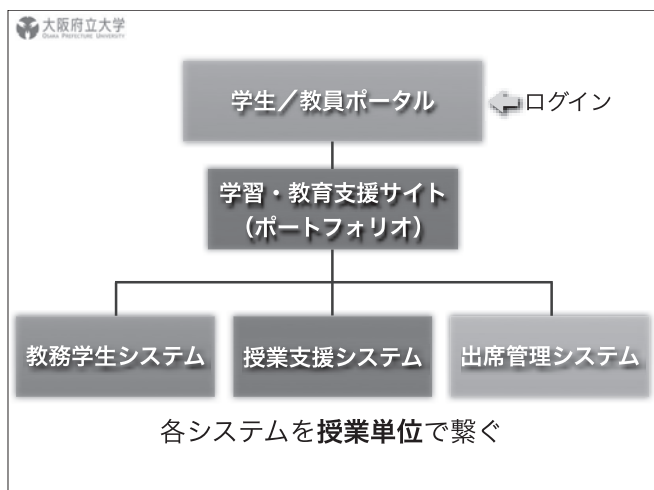
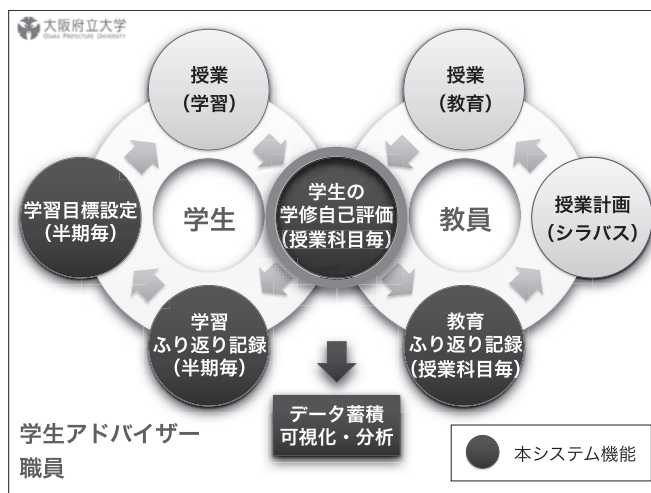
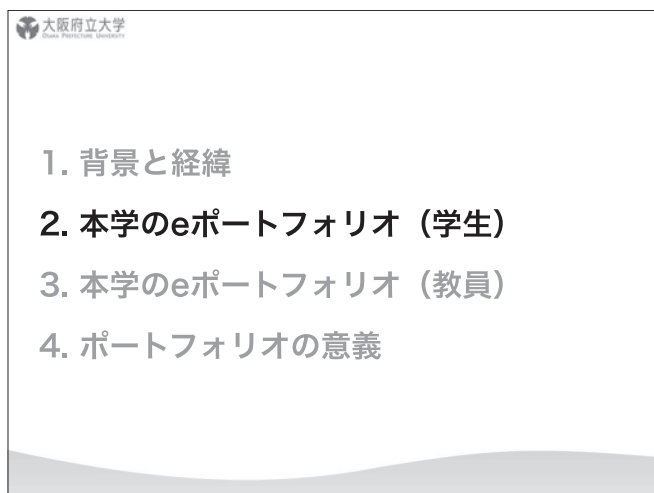
システム構築と運営体制

- ・2011年9月 ポートフォリオシステム構築開始
 - ・開発期間 6ヶ月（1次）+ 3ヶ月（2次）
- ・2012年4月 「学習・教育支援サイト」として運用開始

教育改革専門委員会

**ICTアクションプラン
推進委員会**

- ・運営方針の決定（オーソライズ）
- ・データの教育改善への活用検討
- ・システム運用と改修方針の検討



これらに加えて、

- ・授業の良かった点
 - ・授業で特に改善してほしい点
 - ・各12項目（チェックボックス形式）
 - ・授業改善提案（自由記述）
 - ・学生から教員へのメッセージ
- ← 逆に、教員からクラス全体へのメッセージも

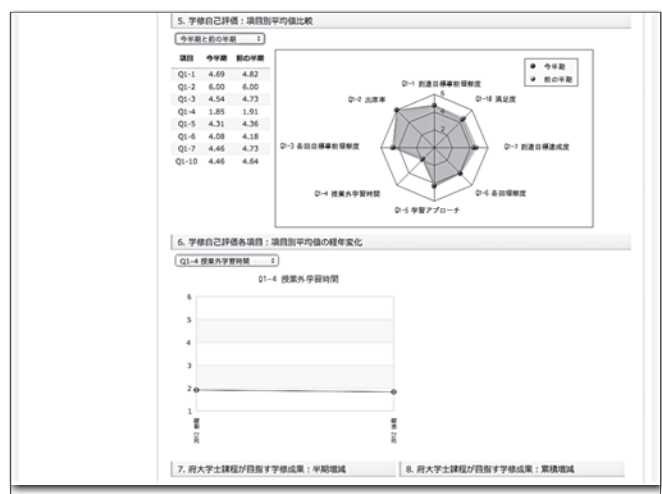
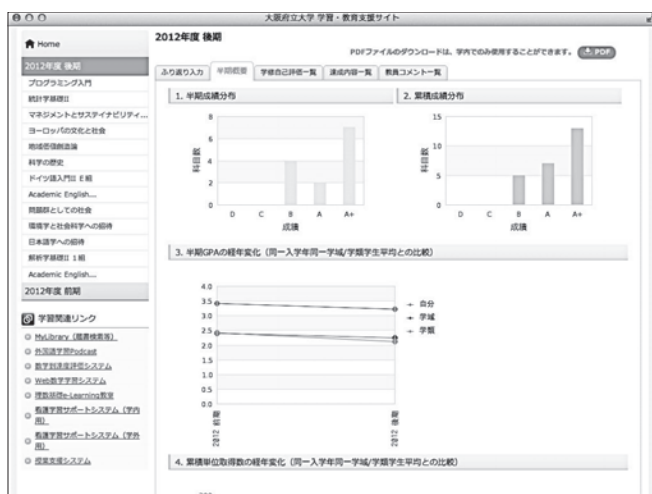


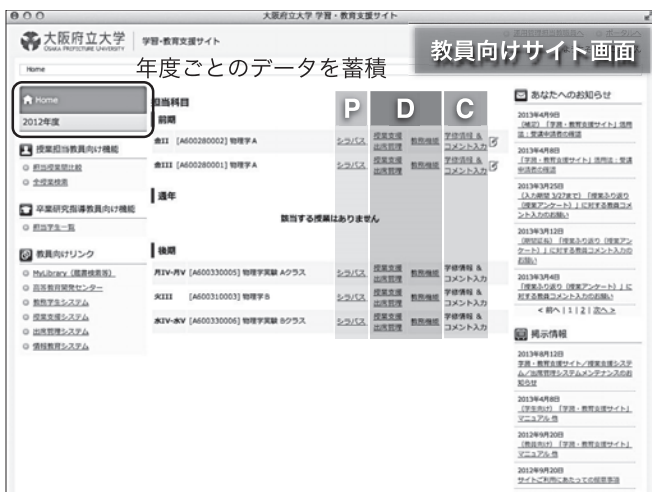
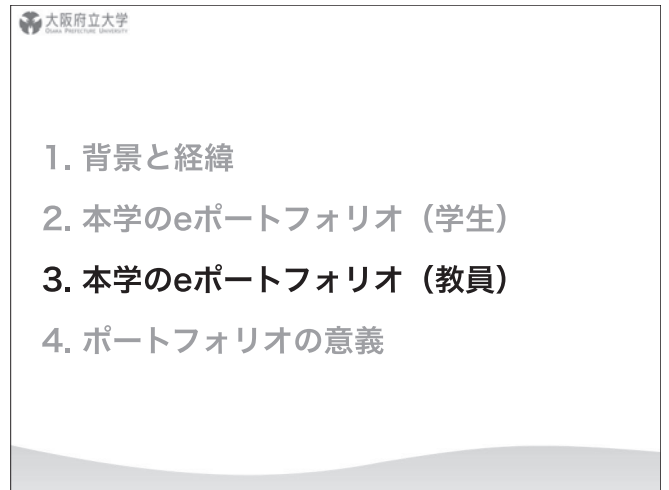
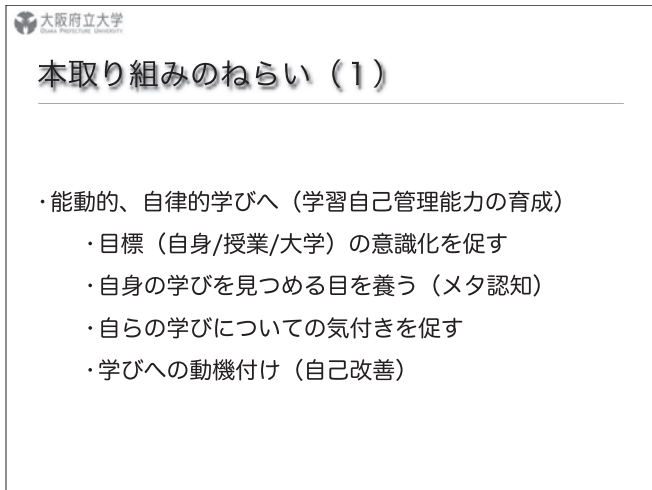
半期全体のふり返り

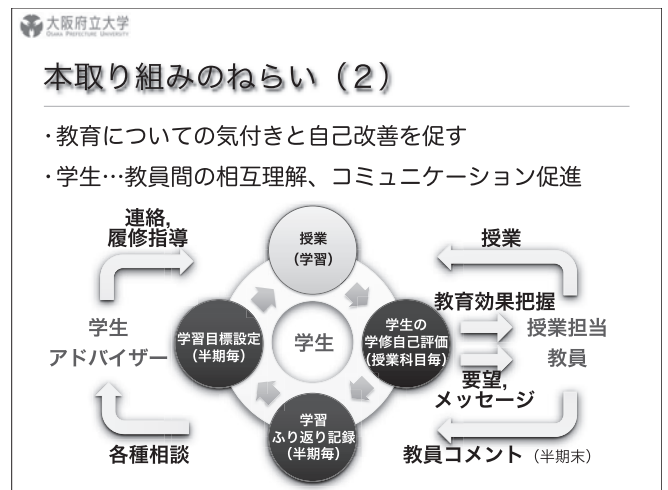
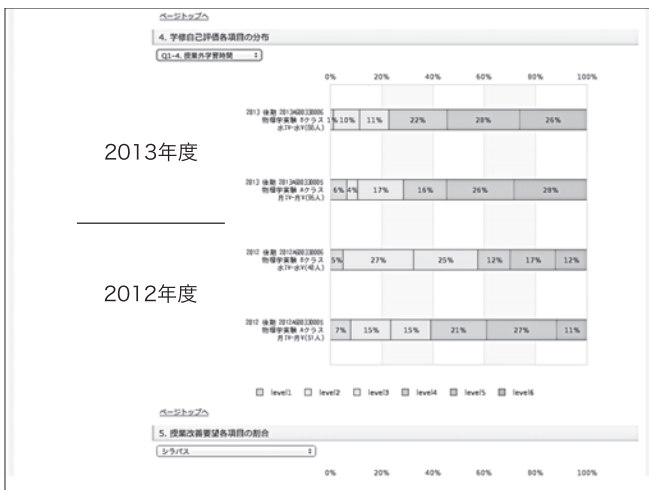
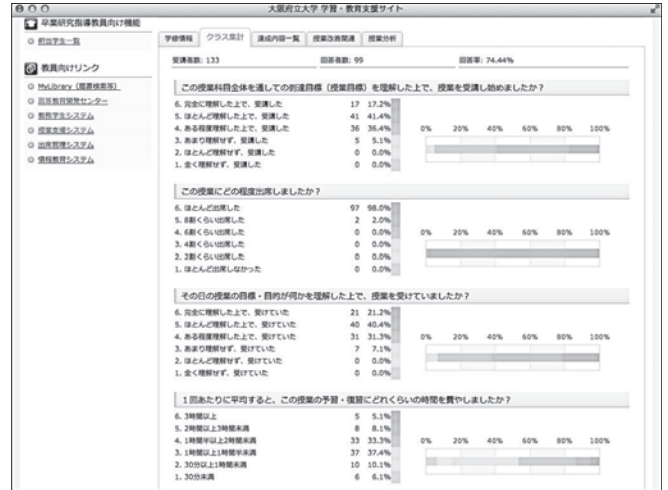
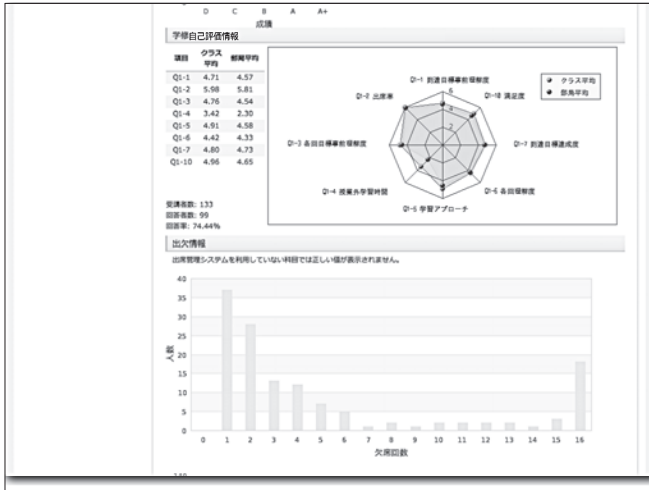
授業毎の学修自己評価、成績などをもとに...

- ・自分が立てた半期の学習目標に対するふり返り（記述式）
- ・大阪府立大学学士課程が目指す学修成果*への５段階評価
 - ・「知識」に関する２項目
 - ・「判断・行動」に関する３項目
 - ・「技能」に関する４項目

(*) <http://www.osakafu-u.ac.jp/info/education/result.html>







1. 背景と経緯
2. 本学のeポートフォリオ（学生）
3. 本学のeポートフォリオ（教員）
4. ポートフォリオの意義

ポートフォリオとは

単純に言えば、

成果物を蓄積したもの
（作品集）

だが...

「学生が、自らの学習成果の達成状況について整理・点検するとともに、これを大学が活用し、多面的に評価する仕組み（いわゆる学習ポートフォリオ）の導入と活用を検討する。」

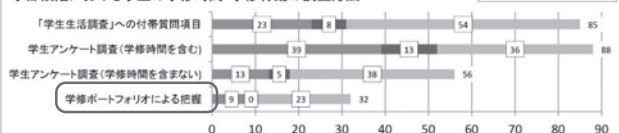
「授業改善に向けた様々な努力や成果を適切に評価する観点から、教員が教育業績の記録を整理・活用する仕組み（いわゆるティーチング・ポートフォリオ）の導入・活用を積極的に検討する。」

「学士課程教育の構築に向けて」
(2008.12.24) 中教審答申

「学長を中心とするチームは、学位授与の方針、教育課程の編成・実施の方針、学修の成果に係る評価等の基準について、改革サイクルの確立という観点から相互に関連付けた情報発信に努める。特に、成果の評価に当たっては、学修時間の把握といった学修行動調査やアセスメントテスト（学修到達度調査）、ルーブリック、学修ポートフォリオ等、どのような具体的な測定手法を用いたかを併せて明確にする。」

「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて
～生涯学びつづけ、主体的に考える力を育成する大学へ～」
(2012.8.28) 中教審答申

学部段階における学生の学修時間・学修行動の調査方法



学部段階における学生の学修成果の把握方法



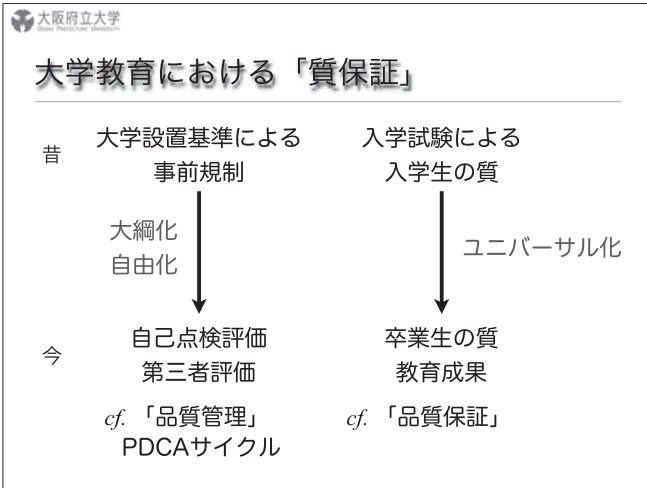
「大学における教育内容等の改革状況について」(2011年度)より
学びのプロセスと成果の把握

ポートフォリオの持つ、2つの役割

- ・プロセスの可視化による「ふり返し」と「気づき」の誘発
 - ・エビデンスとしての、成果（達成度）の公開
- 教育の「質保証」との親和性

本学のeポートフォリオの特徴

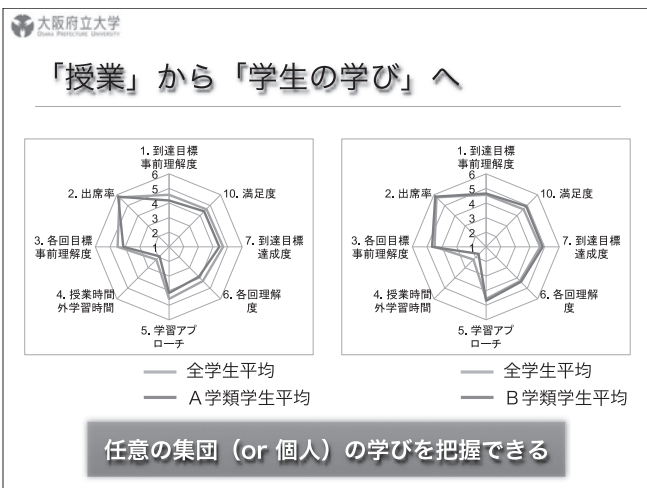
- ・前者に力点
- ・学生と教員にとってのポートフォリオ
- ・在学/在職期間全体を通じてのポートフォリオ



大阪府立大学
Osaka Prefecture University

本学での意義

- ・（教育・学習における自己改善支援）
- ・「質保証」の仕組みの一つとして活用
- ・学内での、教育・学修情報の可視化



学生毎の学修自己評価項目別平均値（+GPA）間の相関

	6. 各回理解度	7. 到達目標達成度	8. 学修成果満足度	9. 半期GPA
1. 到達目標事前理解度	0.770	0.668	0.675	0.199
2. 出席率	0.219	0.388	0.287	0.583
3. 各回目標事前理解度	0.853	0.732	0.712	0.212
4. 授業時間外学習時間	0.420	0.300	0.298	0.116
5. 学習アプローチ	0.801	0.661	0.664	0.221

京都大学高等教育研究 第20号 1-15頁（2014）
http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/kiyou/data/kiyou20/01_takahashi.pdf

大阪府立大学
Osaka Prefecture University

学内での、教育・学修情報の可視化

- ・（学生）受講科目の成績分布・GPC公開
- ・（教員）全開設科目の学修情報公開

大阪府立大学
Osaka Prefecture University

なぜ？

どのように？

ICTアクションプランの策定と実行

TeachingからLearningへの視線の転換

**授業（評価）アンケートを止め、
eポートフォリオを導入しました。**

どんな？

役立つ？

学修自己評価を核とした、学生と教員のためのポートフォリオ

「質保証」、学習・教育情報の可視化にも